

市民を信じることが、未来を変える

長野県 箕輪町 土岐 俊 (研修生)

8日間のポートランドにおける国外調査について、振り返ってみたい。

最初に自転車で市内を回り、市民にインタビューを行った。「あなたはポートランドが好きですか？市のためにしたいと思う事がありますか？」市民参加が進んでいると言われるポートランド、私の町と何が違うのだろうか。それが出発点だった。

様々な立場の人に話を聞く中で見えてきたことは、多くの人はポートランドの事が好きだが、「市のために」という観点で何かしているという人はほとんどいないという事だ。地元マンションが建つことになり、自動車が増えて地域の安全が損なわれそうなので、対策を考える、息子の通う小学校の様子が知りたいので、ボランティアをすることで学校の様子を知るなど、身近な問題からスタートしている。その後、個人での関心から社会的な活動へ進化し、結果的に市のための活動に見えることはあるが、市のためにとスタートしてはいない。また、活動の多くは便益や利益といった見返りをどちらかと言えば戦略的に考えており、無私の奉仕の精神といったものには基づいていない。そして、それぞれの立場で個人の関心から発して行っている活動が積み重なってパブリックを形成し、市民リーダーを輩出している。その後お話を聞きしたどの行政体からも、パブリックを形成するパートナーとしてボランティアやNPO,NGOの存在は不可欠であり、前提である旨の話をお聞きした。

私の町と違うところ、それは日本では行政がパブリックの領域を自ら狭めていることではないかと思う。行政は口では住民協働、協働のまちづくりと言いつつも、パブリック＝ガバメントであると思い、地域の課題地域で解決する機会を奪ってきた。その結果、住民も何か問題が起きると、行政の仕事として考え、自ら解決するという発想をしなくなる。そんな中で今更、地域の課題は地域でと言ったところで受け入れられるはずもない。行政と住民との新たな関係性をどう構築するか、時間のかかる課題であると思う。

次に市民と行政との関係と、行政の立ち位置である。広域行政体のメトロ、ポートランド市役所で市民参加についての話を聞く中で2つのポイントがあった。

ひとつめは、行政の徹底的に市民の意見を聞く姿勢と、市民を信じ結果を市民にゆだねる姿勢である。

市の今後25年間の長期計画であるポートランドプラン。現在作成5年目に入ってなお、住民の意見を集めている。市では多様な人種とマイノリティに合わせて、彼らの意見を聞き、時には情報にアクセスできるよう教育し、絵で分かるように工夫するなど、徹底的に市民の声を集め、反映した計画を作っている。職員は住民の声を聞くことに専門化し、予算を裂き、声を聞く仕組みをつくっている。システムだけでなく最も素晴らしいのは、各

種団体から意見を聞くために、それぞれの団体に職員がアプローチして個人的な信頼関係をつくり、彼らの関心を知り、その上で声を集めていることだ。懇談会を開いて行政が原案を一方的に喋り、質疑応答をして終わってしまうような計画づくりとは異なっている。

「本当に市民の声を聞こう」そう思ったら、やり方はこうなると感じた。これならば、市民は行政に声が届くと感じてもらえ、行政も本当の課題は何なのかを知ることができる。素晴らしいのは議論の結果行政が当初想定していた結論とは違う結論になったとしても、その結論の変更を受け入れるところだ。当たり前と思うかもしれないが、日本の行政では一度内部で決まった方向性を覆すのは非常に難しい。

ふたつ目は、プロフェッショナルとしての行政の立ち位置である。

情報提供と意見を聞くことに徹することに加えて、行政が先頭に立ってまちづくりをしていくというより、むしろ行政は市民についていくという印象を受けた。それは日本でいう大学と行政の関係に似ている。アーバングリーンの Chips 氏はその点について、「行政は実際に現場で活動する市民には追いつけない。市民のパッションを引き上げて形にし、育てる、整理する、調整することが行政の役割。自治体に、市民のやりたいことをやってもらうことが最大のチャレンジ」であると話してくれた。周到な資料収集、分かりやすく伝えるための工夫、どうやったら相手がアクセスしてくるか、関心事は何か、関係を作り、可能な限り材料を揃えて市民が選ぶ環境を作るといった、周到である意味でしたたかな立ち位置。定型業務がどんどん外部化されて行く中、公務員としての付加価値は何か、なぜそこに公務員がいるのかという課題の答えを彼らのプロフェッショナルな仕事が見せてくれた。

市民の声が行政に届き、行政が変わるという実感を市民が強く持っているポートランド。日本においてもまずはそういった小さな実感を持てるようにすること、それは私の目の前の仕事でも始められることだ。

NPO,NGO などの団体のリーダー達からも話を聞くことができた。そこに共通していることは、小異に囚われずその問題について個別の利害を超えた大きな目標を設定し、可能な限りステークホルダー（そこには行政も含まれる）を集めて話し合うことで、多様な解決策が生まれ、それを話し合う過程でコミュニティができ、大きな問題を解決していく力になっていくということだ。核になるグループは小さいとしても、関係する団体を巻き込んでいく事で大きな問題を解決することができる。

日本では行政だけで決めずにステークホルダーを巻き込んで最初から話をすることは少ない。しかし、イノベーションラボを行う過程で多くの人を巻き込むことがいかに革新的なアイデアを産み出す素地を作れるかを強く実感した。これも目の前の仕事から少しずつ変えていく事が出来ると思う。イノベーションとは、住民を信じて巻き込み、話をする事であると知った。

最後に、行政だけでまちづくりを続けて行くことの限界と弊害を、ポートランドで改めて感じさせられた。課題は沢山あるが、それをほとんど市民と考えてこなかった私の町で、市民やステークホルダーと一緒に考えたら、どれだけのイノベーティブなアイデアが産まれるのだろうか、私はわくわくしている。

多くの事は、すぐに日本で取り入れることはできないかもしれないが、私がまず取り組むべきことは、職場を動かせる存在になる日に向けて目の前の仕事にきちんと取り組み、住民と職員から信頼を得ていくこと。同時に、学びの理解者を増やし学びを活かせる場所を、絶対に失敗しない方法でしたたかに作っていくこと。それまで情熱を持ち続け、町での実現のために進化させ続けること。

素晴らしい学びの機会を作ってくれた PSU の皆さん、TKFD に感謝したい。